

先住民族アイヌを考える

Considering the aborigines of Japan-Ainu

後 藤 拓 人
Takuto Goto

目次

第Ⅰ章	日本人の形成過程学説におけるアイヌの関連性	2
1	日本先住民族を考えた先駆者達	2
2	2人の外国人研究者	5
3	明治から大正へ	8
4	大正から戦後にかけて	12
第Ⅱ章	遠くて近い北海道と沖縄	15
1	アイヌの沖縄体験談	16
2	アイヌ女性の入れ墨	18
3	琉球女性の入れ墨	19
4	様々な類似点の面白さ	20
5	結論にかえて	22
第Ⅲ章	アイヌの未来と先住民族教育の課題	26
1	まだ知られていないアイヌ民族	27
2	今後の課題として	31
3	オーストラリアでのアボリジニは	32
4	Aboriginal Education と先住民族教育	34
あとがき		38

第Ⅰ章 日本人の形成過程学説におけるアイヌの関連性

日本人の形成過程については、古くから様々な学説が提唱され、多くの学者、研究者がアイヌの言葉・行動・遺物・文化などをきっかけやヒントにし、自らの考えを幅広く展開させ、独創的な学説を唱えてきた。その意味でもアイヌは日本人の形成過程において最も重要な根底の一部とって間違いないであろう。この章では、その学説を幾つか紹介していくことにする。

1 日本先住民族を考えた先駆者たち

もっともらしい考えを持ち始めたのは、江戸中期ごろであろう。かつては日本人が生活を始める以前に、巨人が存在したと考えられたり、至る所で発見される石器は天上から降下したものであるとする『石器天降説』や、それから進んで天狗のものであらうとか、雷神の使用したものであるとする『石器天工説』が現われ、その後によりやく『石器人工説』が抬頭し始めた。

新井白石などはその最も早い頃の研究者であった。彼は土中で発見された石器に強い関心を持ち、それを製作した者は『孔子家語』『国語^{*注}』などに記載されている石^{せき}祭^{*注}の^{しめく}ことであるから、古代中国の北方民族・肅慎^{しん}国人であると断定している。肅慎人が佐渡や蝦夷地へ侵入した時のものであり、日本人ではなく肅慎人であると主張、日本石器時代の先住民を非日本人とする人種論に到達した。

また、江戸後期の木内石亭も実際の出土石器と比較考古学的、民族誌的に北海道石器と本州石器を同一物と断定、先住民族は蝦夷^{えみし}と考え、石器は蝦夷が製作したものであり、かつ蝦夷はすなわち肅慎であると説いたのである。

更に菅江真澄は、東北地方を旅行して多くの石器土器を実見し、北海道根室発見の土器と同一物であることから、根室の土器がアイヌの製作したものであるとすれば、東北地方の縄文土器発見地には、かつてアイヌすなわち蝦夷が先住していたと考定している。

このようにして、江戸時代には古代の遺物に関する研究が我が国の学者によって独自の発達を遂げた。人体においてその結論は、石器や土器は漠然と蝦夷が製作したものであろうとの推定が殆どを占める所まで漕ぎつけたのであったが、それ以上の進展は示さなかった。

その理由としては第一に、自ら発掘調査した者がなく、単に石器や土器の古物を他人より収集し、文献上の考調を試みて満足していたので、時代観念が明瞭ではなかったこと。第二に、石器時代と金属時代との判別が出来ず、発展段階が不鮮明であり、また、進化論的な考えを持ち合わせてなかった為、一括して取り扱ってしまったこと。そして第三に、蝦夷を比較の対象としただけで、殆どが他に比較の対象を求めているので、比較研究の視野が狭いものとなってしまったこと、などが挙げられよう。彼らの説は多分に思弁的であり、客観的な論拠を持っていなかったということである。

こうした為、江戸期の学者の非常に独創的な研究の努力や苦心にもかかわらず、その民族論は甚だ不徹底なものとなった。一面では非常に進歩的見解を示しながら、その反面に漠然とした神秘的な見解が重なっているために、非科学的になりがちで研究が停滞し、次の時代の欧米の学者の新たな科学研究を待たなければ、研究の新しい進展は望めなかつ

たわけである。

2 外国人研究者

江戸末期、欧米の広い博物学的知識を駆使し、科学として日本人を最初に問題にしたのは、オランダ商館の医師として来日したフリッパ・フランツ・フォン・シーボルト（ドイツ人。1796～1866）であった。彼は人類文化の発展段階として、石器時代、青銅器時代、鉄器時代の三大別があることを知っていたので、日本の場合にもこの例があらうと考え、容易に石鏃^{いさく}などを実見して石器時代遺物と考えた。石鏃が日本北部を中心として、全国に渡って発見され、北部は古代の蝦夷の国の所在地で、激戦の末天皇族の占領地となったのであるから、蝦夷の国の居住者であったアイヌが石器を使用したのである。そして石器時代はアイヌが居住し、その後日本人がアイヌに代わって居住したと見て、民族差を考定し、石器時代非日本人、すなわち当時“縄文人”という言葉はなかったが、『縄文人＝アイヌ説』を提唱した。現代のアイヌはその直接の子孫であると考えたのである。更に興味深いものに、アイヌと琉球人は身体特徴に多くの類似点がある為、『アイヌ・琉球人同系論』においてアイヌと琉球人も同系の集団であると主張している。これには次章でも詳しく触れたい。

だが、この『縄文人＝アイヌ説』は木内石亭などの見解を母胎として生まれたもので、我が国の学者の知り得なかった西洋の進んだ史学的で考古学的知識を持っていたシーボルトが、その知識を応用して、巧みに我が国学者の成果を利用し、一個の学説として組織化し、形態を整えたに過ぎなかったが、久しく日本人の起源論・人種系統論として当時の世界の学界に通用していたのである。なお、明治初年、オーストリアの外交官として来日したシーボルトの次男ハインリッヒ・フォン・シーボルト（元外交官。1846～1911）は、こ

く僅かの日本滞在で充分証し得なかった父のアイヌ説の不足を自ら補い、親子二代にわたって『縄文人＝アイヌ説』の完成に努力を注いだ。

このシーボルト家のアイヌ説に対し、縄文時代住民はアイヌではなく、プレ＝アイヌであるとの非アイヌ説を樹立して対抗したのは、1877年大森貝塚を発掘したアメリカ人エドワード・S・モース（アメリカの動物学者、日本研究家。1838～1925）であった。大森貝塚の発掘による知識に基いて、彼は次のように考えた。日本の縄文時代人は優秀な土器製作技術の持ち主であった。ところが北方民族・イヌイット（エスキモー）、アリユート、カムチャダル及びアイヌはいずれも土器を製作しない。アイヌは専ら木器を使用する。また、貝塚の人骨は骨折やひびが確認されているが、これは縄文時代人に食人の風習があったことを意味するもので、アイヌは性温和であり食人の習俗を有しない。従って貝塚積成者すなわち縄文時代住民を、アイヌとすることはできない。彼等はアイヌ以前に日本に住んでいた縄文時代の民族であるべきとし、これをプレ＝アイヌと述べた。要するに、縄文時代人の次にアイヌが入ってきて民族が交代、更に現代日本人の祖先がアイヌに代わって日本列島に住むようになったというもので、日本列島では二回に渡り民族が交代したというのがモースの『プレ＝アイヌ説』の論旨であった。

このように明治初年には、シーボルト父子のアイヌ説、モースのプレ＝アイヌ説と、外国人学者による日本先住民族についての見解が対立していたのである。

3 明治から大正へ

1887年（明治20）以後になると、欧米に留学した日本人研究者が帰国して大学で教鞭をとるようになった。その中で人類学に関して大きな功績を残したのは坪井正五郎、小金井

良精^{よしきよ}、及び鳥居龍蔵である。

坪井正五郎（1863～1913）は、モースのプレ＝アイヌ説の立場に立って、しかもそれとは別の一説をなし、アイヌ説に対抗した。彼は縄文時代の先住民族は、日本人でもアイヌでもなく、アイヌよりも先に住んでいた。コロボックルという民族であるとの説を提示したのである。コロボックルとは、アイヌの口碑や言い伝えに登場する伝説上の人間で、背丈が低く、穴の中で生活する民族である。このアイヌ語の語義は「^{ひき}落の下に居る人」「落の下にも収まるような背丈の低い人」などと一般的に考えられ、現在でも観光地などの民芸品屋で木彫りのコロボックル人形を見ることができる。この伝説上の民族コロボックルが日本最古の先住民であるとの根拠として、骨から推定できる縄文時代人の身長が現代人よりも低く、アイヌは土器も石器も製作しないが、縄文時代人はこれらを大量に製作したこと。そしてコロボックルには髭^{ひげ}が無く、縄文時代の土偶に髭を示すものが無いことや、縄文時代人は穴（竪穴式住居）で生活していたことなどを挙げた。更には、コロボックルに最も近い人種に、北米大陸の北端、及びグリーンランドの住民、イヌイット（エスキモー）を挙げ、『コロボックル＝エスキモー民族説』まで主張した。

一方、コロボックル説に対し、全く新しい実証的な立場から最も科学的なアイヌ論を創唱したのは、森鷗外の義弟小金井良精（1858～1944）は二度に渡る北海道旅行で、多くのアイヌ人骨を発掘し、当時すでに少しずつ発見されるようになった縄文時代人骨を現代日本人骨と比較研究した結果、縄文時代人はアイヌの祖先であり、その後現代日本人がアジア大陸から侵入して居住したというシーボルトの説によく似た『縄文人＝アイヌ説』へと到達した。

坪井説と小金井説は鋭く対立したが、コロボックル説に対し致命的な実証的論拠を示し

て、アイヌ説を殆んど定説化させたものがある。それは不幸にも坪井の助手鳥居龍蔵(1870～1953)の北千島アイヌの調査結果であった。北千島アイヌが貝塚や竪穴を構築し、石器も土器も使用した縄文時代の文化段階に属する状態にあったことが明らかにされたのである。その上、そもそもコロボックルというものがアイヌの説話に出てくるだけで、その存在を客観的に立証することは不可能で、小金井説の方は人骨という具体的資料に基づく研究によるものであることなどから、坪井説は大きな不利を招いた。彼が1913(大正2)にモスクワで客死した為、コロボックル説一代限りの学説となり、以後はアイヌ説の独壇場と化すのである。

以後、一時はアイヌ説が学界を風靡したが、コロボックル説をアイヌ説またその前段階としてのプレ=アイヌ説とアイヌ説の対立は、すべて日本縄文時代人すなわち日本列島の先住民族についての議論であった。ここで、先住民族がアイヌであろうと、また非アイヌであろうと日本人の祖先となる民族でないとする所は、共通であることに注目すべきであろう。大体において日本人の祖先は、縄文時代の先住民族とは関係がなく、縄文時代の終末期に大陸から列島に侵入し、先住民族を次第に北方へ圧迫しつつ、現代日本人の祖先となり、繁栄したものであるとする点においても、両説に共通するものがあつたのである。

そして日本先住民族はアイヌであり、日本人の祖先は弥生式土器を伴って、やや後れて列島に入り来た新来の民族であつて、この両者が列島内で互いに接触、融合あるいは抗争し、次第にアイヌが日本人に征服され北方に退去する途上で、その一部が日本人と混血したのであらうとの説にはほ落着いてきた。確かに現在の日本列島を見回しても、この説は的を射ている感がある。北海道や東北・関東には比較的縄文色が残り、近畿・中国地方などは弥生式特質が強い。気質なども大阪や

広島、福岡など西日本には激しい人が目立ち、一概には言えないが、韓国・北朝鮮の人々と類似性を見られるような気がするのである。

4 大正から戦後にかけて

大正末期から昭和初期にかけては、長谷部言人と清野謙次による新しいタイプの学説が現われた。従来の学説が人種の交代を基盤としていたのに対して、彼らの説は縄文時代人が日本人の直系の祖先であるとした点が異なっていた。しかし、縄文時代人から現代日本人への変遷の過程について、両者は見解を異にしていたのである。

長谷部言人(元東大理学部教授、1882～1969)は縄文時代人が時代的小進化を遂げて、現代日本人になったのであり、人種の交代や混血はないという連続説を展開する一方、清野謙次(元京大医学部教授、1885～1955)は主として関西地方の貝塚や古墳を多数発掘し、1,000体に近い人骨を収集した。そしてそれらを近隣諸民族と比較した結果、縄文時代人やアイヌが近隣の集団と混血した為に、現代日本人に変化したと考える混血説に至った。

戦後になってからも鈴木尚と小浜基次とが鋭く対立するようになった。鈴木尚(1912～)は関東を中心に活発な遺跡調査、発掘を行い、縄文・弥生・古墳・鎌倉・室町・江戸・明治の人骨を系統的に収集し、比較した結果、縄文時代から現代にかけて形態が連続的に変化することを突き止め、長谷部連続説を豊富な資料で証明した。小浜基次(1904～1970)は、昭和20年代に行われた全国的な生体計測のデータを分析し、清野混血説に近い結論に到達した。

このようにみると、長谷部・鈴木説と清野・小浜説の差異は、人種はそれ自体で時代的に変化する、という小進化を認めるか否かという点にあることに気付く。しかし、人種における小進化の概念は欧米でも認められており、また鈴木尚が各時代の骨を資料として

いるのに対し、小浜基次は現代人の生体計測値のみを唯一の拠り所としている為、長谷部・鈴木説の方が、説得力に関しては富んでいる結果となった。が、混血説においても多くの支持者がいたことは言うまでもない。

以上のように、日本人の形成について一部の学説を簡単に述べてきたが、研究が精密になるに伴い、事実は増々複雑な様相を呈するに至っている。従って現在では、過去に提唱されたどの学説でも日本人全体の形成過程を説明することはできないであろうし、またアイヌや琉球人を含めて説明するとなると、それは至難のわざと言えらる。だが、どの説もとても素晴らしく、また魅力的で、全てを組み合わせ様々な角度から考えを巡らせば、限り無く真実に近付くことができるのではなからうか。私の考えている結論は次章の後半で述べることにしよう

第Ⅱ章 遠くて近い北海道と沖縄

外国へ行ってよく経験することだが、見かけた人が日本人かどうか案外分からない場合がある。朝鮮人、ベトナム人、モンゴル人などは割にはっきり分かるのだが、日本人となると言葉を聞いて、やっぱりそうだったのか、ということがある。というのは、顔の形も体の大きさもこんなにバラエティに富んでいるのはアジアの中でも珍しい民族といえるからではなからうか。私などは国内においても日本人に英語で話しかけられた経験がある。しかし、縄文から弥生の時期の民族の移り変わりを考えれば、それも頷ずけるものとなろう。アイヌ・蝦夷・熊襲・隼人や琉球人、そしてそれらの混血。これらの集団はいずれも多くの謎につつまれ、今でもその出身について種々の議論が戦わされている。

前章でも触れたが、フィリップ・フォン・シーボルトは『アイヌ＝琉球人同系論』を唱えたことでもよく知られている。その後、琉球・南島の人々は、アイヌと無関係であると

する説が定着したかにみえたものの、近年アイヌ、琉球・南島集団の類似が注目を集めつつある。そこでこの章では多少独断的ではあるが、その類似について考えてみようと思う。

1 アイヌの沖縄体験談

数年前のことになるが、沖縄へ旅行したアイヌ男性の話を聞く機会があった。彼はギョロツとして目、高い鼻、長い髭と髪、まさに外国人を思わせる風貌ではあるが、北海道内ではアイヌとすぐに分かる外見である。彼の話によると、“俺は北海道から来たアイヌだ”と言うと現地の人らが歓迎してくれ、厚いもてなしを受け“泊まっていきな”とまで言われ、殆んど金を使わなかったとのことである。どうやら沖縄の一部の人はアイヌに対し類似性を認識し、仲間意識のようなものを持っているのであろう。北海道のアイヌにも同様なことがいえる。テレビなどで沖縄の人を見ると“ウタリ（仲間、同胞の意）みたいだ”と多くの人が口にする。

30年程前に、北海道の弟子豊治氏外のアイヌ民芸使節団が沖縄を訪れたとき同行した弟子シギ子さんにも話を聞くことが出来た。それによると、九州から沖縄までフェリーで向かったのだが、やはり沖縄の人が沢山乗っており、ある一人が沖縄の言葉で話しかけてきたそうだ。外見から一団を現地人と思っただしいが、彼らには当然何のことやら分からず丁寧な日本語で聞き返すと、彼は「かっこつけないで、沖縄の人間なら沖縄の言葉で話せ」と怒ったそうだ。その彼を説得するには苦労したが、事が分かれると驚きを隠せなかったという。

更に彼女のショッキングな話は続いた。一団の中には口のまわり、手の甲に入れ墨をしたフチ（おばあちゃん）もいたが、その入れ墨を見た現地のある老婆が「あなたと同じ形の手の甲の墨をした人を近くの島で見たことがある」と驚いたそうだ。その島の名前まで

は確認できなかったが「ほとんど同じような形だった」と弟子シギ子さんという。彼女の話しがウソとも思えず、遠く離れた北海道と沖縄で外見だけでなく、風習にも幾つかの共通点があることは、私自身の心の中にも深く残るものとなった。ここでそれぞれの入れ墨に関する文化の比較をしてみたい。

2 アイヌ女性の入れ墨

アイヌの女性は大体約12～16歳位に、口のまわりと手の甲から肘にかけて入れ墨をした。それは経験のある女性によって行われ、まず口のまわりの入れ墨をする部分を良く切れる刃物で細かく傷を付け、そこへ白樺の皮を燃やしてとった炭を擦り込む。炭をとる時には、小さく薄く剥いた白樺の皮の中から傷や汚れない部分だけを選び、それを少しずつ燃やしながら良く洗って汚れを取り去った鍋の底や内側に煙をあてるようにする。この時、白樺の皮や鍋に傷や汚れがあると、入れ墨をした後で傷口がいつまでも治らなかったり、治った後も入れ墨が醜くなるといわれている。入れ墨は普通、女性だけの特徴として行われたが、一部の地方では男性も眉の間に入っていたという記録が残っている。

なぜ入れ墨をするのかという理由にについては幾つかの説が挙げられてはいる。有名なのに、ユーカラに登場するコロボックルの美しい入れ墨がモデルという説があるが、コロボックル自体、正体が不明である。他の説も曖昧さを含む為、はっきりした起源は分かっておらず、また今後の解明も見込み薄である。

ただ、入れ墨をしなければ周囲から一人前の女性として認めてもらえず、結婚することも儀式へ参加することも許されず、死んでもからも普通人の行くとされる“あの世”へは行くことが出来ないとわれ、古い時代には女性は必ず入れ墨をしていた。

3 琉球女性の入れ墨

沖縄では、明治20年代までの婦人は指背と手の甲に入れ墨をしており、それをパジチという。その模様は地方や島によってそれぞれ異なり、宮古・人重山地方では織物の模様らしいいろいろなスタイルがあったが、沖縄本島のそれは指には弓の矢、手の甲には星の形や枳形などの単純なものが多い。大体の意味合いとしては、結婚した印となっていたようであり、結婚の適齢期に成女の印として起こったものであろう。パジチをしていないと『ヤマトウンカイ・スナカーン（大和へ連れていかれる）』と言われ、21歳頃まで一部分でも入れ墨をしていないと嗤い者にされた。また、入れ墨をしなないと“あの世”に行けないという観念は、沖縄・奄美諸島だけでなく、入れ墨習俗のあった東南アジアの諸民族（台湾のアタヤル族、ピュマ族、バイワン族、海南の黎族、ボルネオのカヤン族など）にも共通している。

4 様々な類似点の面白さ

入れ墨に関してみると、起源は互いにはつきりしないものの、他の殆どが一致するのである。女性であること。主に手の甲であること。一人前の女性になった印となること。“あの世”へ行くことが出来ないと信じられていること。ここまで一致すれば、同じ形の入れ墨が見られても全く不思議ではないであろう。かつて医学博士・宮島幹之助（1872～1944）も入れ墨を研究してアイヌと琉球・南島人との間に人種的關係があると説いている。

では視点を変えて他の類似点についても注目してみよう。

沖縄方言の地名には、日本語では容易に解けないのがアイヌ語では簡単に解けるものがある。与那国島にはソナイ、ヒナイなどアイヌ語らしいものが存在し、また沖縄では坂のことをヒラと言うがアイヌ語のピラと共通のものでは、と推測できる。ピラはアイヌ語の

崖の義である。他にもアイヌ語では山脈のことをキムというが、沖縄には金武^{キンブ}という山つづきの村落があり、前述した弟子豊治氏の使節団が巨費を投じ、糸満市の真栄平区に建設された「南北の塔」の北面には“キムンウタリ（山の同胞）”と刻まれている。

そして『随書流求伝』には、このような記載が成^{ようだい}されている。

「楊帝の大業3年（607年）、海師何蛮^{かばん}が羽騎尉朱寛と共に琉球に來た。言語が通じないので、琉球人一人を捕えて歸った。たまたま隨に來ていた日本使節の小野妹子がそれを見て、これは“夷邪久国人”だと言った」この呼び名はアイヌ語の鹿の語源、イヤクと殆ど同一音で通じるものがある、との見方が強い。

更に、身体的特徴、言語、地名、風習などに多くの共通性を見ることができる為、沖縄学の祖と呼ばれる伊波普猷（1876～1947）は、『琉球人種論』の中で、天孫降臨民族であるアマミキヨ族が渡來する以前に沖縄に定住していた先住民民族はアイヌである、と述べている。

さて、遠く離れた北海道と沖縄でのこれらの共通点は何を意味しているのだろうか。多くの共通点イコール同人種、同民族と考えるには、少し無理があるかも知れない。逆に相違点も存在するのである。前章で紹介した研究者達の学説も多少考慮に入れ、仮説ではあるが私なりの結論を述べておこう。

5 結論にかえて

アイヌ、そして琉球人のルーツは同じか、または相当近いのではないだろうか。お互いが認識している類似性、そして多くの共通点とはとても偶然とは考えられない。そして北海道で発掘されたアイヌ人骨の調査によると、かなり濃厚に縄文系の特徴を残していることは前章でも触れた。南九州や南西諸島についてはデータが少ないものの、全体として南下するに従い縄文人的特徴が強くなることは明

らかになっている。シーボルト父子の『縄文人＝アイヌ説』モースの『プレ＝アイヌ説』と、縄文人についても断定はできないものの、アイヌ・琉球人はそれのかなり近い子孫と考えても良いのではなかろうか。元來、日本全域で生活していたのは縄文人であり、そこへ弥生時代に渡來系集団が大陸から入って来て、縄文人との混血により和人として著しく変化を遂げたものと思われる。そしてアイヌと琉球人は、縄文人の特徴を最も強く残している。このように考えると日本列島の北端と南端に離れているにもかかわらず、多くの共通点を持っていたり何の不思議もなく、むしろ当然とみてもよい。ただ注意すべきことち、日本列島を見回しても、混血は幅広く進み、東日本などは殆どの人が縄文式特徴を大なり小なり含んでいる為、アイヌ・琉球人が渡來系集団から迫害を受けて北海道や沖縄諸島へ追いやられたのではないという点である。彼らは少なくとも縄文時代からその地の定住しており、他の影響を受けずに小進化したのである、と私は考えている。

最後に、この章のテーマに取り組み考えていく中で、一つの疑問も浮上してきた。アイヌも琉球人も古モンゴロイドの形質を受け継いだ縄文人の特徴を残していると述べたが、フィリピンのルソン島をはじめ東南アジアの諸地域にも、古モンゴロイドを思わせる多毛の種族が存在する。これらの地域はとりあえず考察外なので詳しく述べる時間はないが、身体的特徴、入れ墨の箇所でも風習において類似性を確認することが出来るし、更に深く追及する価値は十分あるであろう。そして、アイヌと琉球人の類似した形質に取り組む場合に、このような東南アジア地域における古モンゴロイド形質との関連についても考慮する必要性を強く感じさせられた。

第Ⅲ章 アイヌの未来と先住民族教育の課題

アイヌは元来、自然の豊かな恵みを受けて、独自の生活と文化を築き上げてきた。しかし、本州・四国・九州の各地からの移住者が増加し、北海道の開発が本格的に進む中で、アイヌの生活の基盤や文化が奪われ、同時に古くから続いてきた生活体系、習慣などにより、激しく変化する社会に対応することが出来ず、社会的にも経済的にも恵まれない環境下に置かれている人が多かった。

その後の歴史的経過の中で、1899年に「北海道旧土人保護法」が制定され、1974年からは二次にわたる「北海道ウタリ福祉対策」が推進されてきた。これらにより、アイヌの生活の状況は改善が図られたものの、依然としてかなりの格差が存在する。

1986年6月に北海道が実施した「ウタリ生活実態調査」によると、その人口は24,381人であり、生活水準、就労状況、所得水準、高校や大学への進学状況などの点で一般道民との格差があり、とりわけ高校や大学への進学状況についての格差は著しい。またアイヌに対する差別の事例も指摘されており、前に記した「ウタリの実態調査」のアンケートの結果でも、23.1%の人が「ひどい差別を経験したことがある」と答え、差別が「現在もある」という回答が調査対象者の61.2%にもものぼっている。このような差別は、一般国民のアイヌに対する理解が十分でないこと、また無知であることなどから生じているものと考えられる。

更にアイヌは、独自の宗教・言語・文化を形成し保持している民族であるが、その殆どの伝承者が高齢化していることなどから、アイヌ語及びアイヌ文化の継承・保存活動のより一層の促進が課題となっている。このようなアイヌが直面している問題と今後の課題についてをこの章では考えてみたい。

1 まだ知られていないアイヌ民族

差別を生み出す大きな要因である一般国民のアイヌに対する不十分な理解と無知が、貴重な先住民族の文化や言語などを闇に葬り去ってしまいかねないのである。典型的な例に『日本＝単一民族国家』論を唱えた中曽根康弘元首相などが挙げられ、更に政府も国連報告において同じ見解を表明したことがある。また、先意識のままにそのように考えている国民も相当数いるのも事実であろう。この無知が差別解消への一番大きな障壁となるように思う。私は観光地のコタンなどの民芸品店で、手伝いをした経験がある。全国各地からの観光客と接するわけだが、時々とんでもない事を真顔で尋ねてくる人を見かけることがあった。

「アイヌの方々はどこに住んでるんでしょうか?」。勿論、彼らには全く悪気はなく、それが伝わってくるので私は簡単なレクチャーをすることにしていたが、殆どのアイヌは表面には出さないものの憤りを感じている。酷いものになると“穴に住んでいる”とか“日本語は大丈夫か”などと質問してくる人もいる。

『アイヌの歴史』の著者三好文夫氏は、本の中で観光客のアイヌに対する無知・偏見が、戦前とそれから40数年へた戦後においても殆ど変化していないという事実を指摘している。彼がこのように書いたのは1973年のことであったが、それから数年後、二風谷アイヌ文化資料館宛に一通の手紙が送られてきた(→資料1 次ページ、原文のまま)

無知と民族的傲慢・偏見を絵に描いたようなこの手紙は、大多数の国民の認識を代表するものではなく、このような極端な考えを持っているのはむしろ少数であろう。が、全く例外で無縁であると言い切ることが出来るのだろうか。

更に、アイヌという言葉が総じてプラス・

イメージに響かない現実もある。アイヌ自身の中にも、アイヌという言葉は民族の心の拠所というより逆に負担となり、出来るなら隠れ遠ざかりたい言葉であると考えている者も少なくない。現在のところ、その多くにとって自然に、あるいは胸を張って唱えられる言葉となっていない。

〔資料1〕小山内洸ほか5名「先住少数民族と教育・文化」三友社出版、1990 P76~77

拝啓

ぼくはアイヌ人が北海道に住んでいることを知って驚きました。週間誌にアイヌ人が北方四島を、アイヌの領土にしたい旨、数行とはいえ、書いてあったのです。又北海道に先住していたなどとも書いてありました。アイヌが北海道に先住していたなどと私は、あきらはててしまいました。アイヌの皆さん、北海道はおろか北方四島も日本のものなのです。その証拠に東京にある沢尻のTV局も、大新聞も、アイヌの事など少しも報道していませんし、学校の歴史の時間にもアイヌの事など教えていません。それは、そうでしょう。北海道は日本人が先住していた事は地名を見ればわかります。

北海道は日本語ですし、小樽、札幌、訓路、網走、箱館も全て日本語です。何よりあなた方の住んでる日高や平取町、二風谷の地名自体日本語であることを見ても、日本全体がもとと日本人の物であった事は疑う予知はありません。

それなのに何故クナシリ、エトロフがアイヌのものと感じたのか。

考えて見ますと、クナシリ、エトロフが日本語の呼名でない事が、誤解を生んだものと思います。しかし、それなら沖縄だって昔はリュウキュウと呼ばれていましたが、古来日本の領土であった事は誰でも知っています。アイヌの皆さん、犬だって三日飼えば恩を忘れないと云われているのに、長い間、日本人に世話になっておきながら、自分勝手な理屈を

つけて、人の土地をアイヌの物にしてしまおうなんて、泥棒の始まりだ！

気をつけるべきでしょう。あなた方アイヌ人は文字がないから、自分達の先祖が、いつ頃、どこから、やって来たのかわからぬので、クナシリ、エトロフの方からやって来たのだと感違いしているのでしょうか？ 私も知りませんから教えてあげられませんが、今後とも、日本に住まわせてもらいたいなら北海道に住める様、土地をくれた親切な日本人に感謝し、お礼の一つも云うべきだと思います。報道→知らせること 感謝→思を感じ、ありがたく思ってお礼の心を表すこと 証拠→あかし

北海道 日高支庁、沙流郡

平取町 二風谷

アイヌ民族資料館様

(誤文は原文のまま)

そして、アイヌ以外の日本人は面と向かってアイヌを何と呼ぶかに躊躇を感じる。アイヌと言うことにこだわりやわだかまりを感じて“アイヌの方々”などと付け加えなければ自然に言葉が出て来ないのが現状である。

さて、これまで紹介してきたアイヌ独自の文化・言語を存続する難しさ、そして国民の差別・無知・偏見を少しずつでも解消してゆくには、どのような手立てが有効だろうか。

2 今後の課題として

自分は政府、教育という場を強調しておきたい。アイヌの存在とその正当な歴史について、この国の政府、教育は拒否し続けていることは確かである。上村英明氏は『先住民族の解放運動』の文中に、「先住民族の人権保障について最低の国のひとつ」と書いた。経済力や教育水準、国の治安などは世界でもトップレベルのランクにある日本だが、この指摘は当てはまると言わざるを得ない。そこで、日本に住む我々がアイヌ問題をはじめとする人種・民族問題を考える上で、世界各地の

先住民をめぐり、国際的到達度の摂取は不可欠であろう。また、複合社会を通例とする世界各国が人種・民族問題をどのような展開で模索しているか、にも注目すべきであろう。それは日本の対外的・対内的な国際化認識を形成する上で有効な手段であると考えからである。

3 オーストラリアのアボリジニは…

ここで、昨年実際に訪れる機会があったオーストラリアの事例を取り挙げてみたい。周知の通りオーストラリアにもアボリジニと呼ばれる複数の少数民族がおり、アイヌ同様に差別が存在し、言語に関してはほぼ一年に一つの割合で消滅し、危機にさらされている。しかし政府や国民の意識は日本とは全くかけ離れていると言っている。

1967年、白人オーストラリア人は国民投票という形で憲法の改正を行っている。それによりオーストラリア連邦政府にアボリジニに関する諸政策を推進する権限が与えられてから、あらゆるレベルでアボリジニの自立を念頭に置き、様々な施策を実行に移している。更に政府は、アボリジニの極度に不利な社会的・経済的状态とふさわしい、かつ過去において彼等から土地を取り上げ民族の離散に追い込んだことから引き起こされる社会的義務を認めているのである。

その表れとしてオーストラリア連邦憲法には127条がない。126条の次は128条となっている。そこには元々国勢調査に当たってはアボリジニを人口に含めないという主旨の条項があった。それと合わせて、第51条の xxxi 項から “Other than the Aboriginal race in any State” という文言も削除された。国民にはなりたくないというアボリジニにも中にはいるだろうが、それによってアボリジニは法の下での平等をひとまず勝ち取ったと言ってもよい。その他にも、一般のオーストラリア人の約9倍と見られているアボリジニの失業

率問題に対し、政府は救済の一環としてアボリジニを対象とした特別な雇用計画を実施したり、「アボリジニ自立促進委員会」を設け、アボリジニの団体・地域または個人について、土地の取得、事業開始、融資獲得、雇用訓練などを援助している。

しかし、政府の一定の努力にもかかわらず、現実には依然厳しいものがあるようだ。実際シドニーで物乞いをしているアボリジニのグループを何度か目にした。やはり一つの国の中で先住民が少数化し、政治、文化的に劣勢な立場に置かれた時、そこから生じる複雑な問題を政治の力だけでは解決することはできない。そこにはものの考え方や意識のありようが密接に絡んでいて、まさに教育の課題となる部分であろう。日本においても少数民族問題と教育は切り離すことが出来ない。

4 Aboriginal Education と先住民教育

日本の教育では、子供達はまず先住民アイヌについての学習機会がない。しかし、他国の先住民インディアン、アボリジニには学校だけでなく、マス・メディアからも触れることがあろう。その為、多くの人がその印象でアイヌを捉えているのだと思われる。やはり、アイヌをはじめとする少数民族というものを、明らかになっている面だけでも教育に組み込む必要性を感じる。オーストラリアの話に戻るが、ここではアボリジニに関する教育が浸透しつつある。州によって異なるが、ノーザンテリトリー区では英語と原地アボリジニ言語との2言語教育が導入され、多くの州で、Aboriginal Education によって、アボリジニの伝統、白人との接触、現在のオーストラリアの歴史を正しく学べるようになっている。そしてこの教育は、目標や内容を確認する上で、教員同志の話し合い、父母及びアボリジニ地域住民との協議が非常に重視され、固定概念にかられがちな大人たちも参加できるのである。

結果として当然のことであるが、オーストラリア人の先住民族に対する認知度、理解度は日本の比ではない。中には日本のアイヌ民族を知っている人も何人かおり、国全体が先住民族に関して幅広く考えていることを窺わせた。

ただ先住民族の数、居住地域の面積など違いもあり、この日豪両国で同じ比較をするのは多少難があるけれども、オーストラリアには“差異”や“違い”を“個性”として積極的に受け止め、互いに共有するものを豊富にし、それを通じて豊かで健康な国の建設を目指すという、言わば哲学のようなものを感じずにはいられなかったのである。本当の豊かさの追求を課題とした場合、このオーストラリアから我々は多くの示唆を受けることが出来るし、多くの部分に学ぶべき必要性を含んでいると思われる。

21世紀を目前として、外国へ行く人々も激増し、あらゆる国で先住民族を目にすることだろう。増々進展する国際化社会の中で、一人でも多くの人が日本にも存在する先住民族を認識し理解を得られれば、アイヌ民族の言語や文化を継承・保存する為の何よりも大きな支えとなることは間違いないのである。

あとがき

最後に、私がこのテーマで先住民族アイヌを取り上げた理由を、簡単に述べておこう。私の母は、アイヌコタン（村・集落の意）で生まれ、そこで育った。そして彼女の父は、コタンの酋長であった。勿論、私にもその血が流れているわけだが、それが理由なのではない。

幼ない頃より、私は毎年夏休みなどは母と一緒に北海道へ行っていたが、その為かアイヌのことは自ずと理解していたものの、アイヌ文化は殆ど消えてしまっているのが、コタンの現状である。

確かに私は、他国で云うマイナリティの部に当たるのかも知れないが、論文でも述べたように多くの日本人は、早かれ遅かれ混血という形で今に至ったと考えている。私はただ両親の世代でそうなったに過ぎない。だから自分のルーツなどは特にどうでもよいと思っている。それよりも、日本が失いつつある少数先住民族アイヌの文化を守ることの方に魅力を感じている。この論文はその気持ちを込めて書いたものである。

異なった生活文化や言語を持つ人々が身近にいて、日常的なごく普通の付き合いが出来るということは、とても楽しいことである。残念ながら、日本人はひょっとしてそんな楽しさを長い間知らずにきたのではないかと、この論文を書きながら思った。

例えば、アイヌのムックリやリムセを一緒に踊ってみれば、実にその土地に合ったリズムが伝わってくる。そして、国際化などと大上段に振りかぶらなくても、普通の生活者という感覚で外国の人々と接してみると、文化的な違いがあることの楽しさを実感する。大学へ進む為、就職する為の教育も重要なのかも知れないが、こういう楽しさや面白さを感じることができる教育がどんどん広まれば、と心から願っている。

《参考文献》

第Ⅰ章 水野 裕『日本民族の源流』雄山閣、1970

江上波夫『民族の世界史2 日本民族と日本文化』山川出版社、1989

江上波夫『日本人とは何か 民族の起源を求めて』小学館、1984

植原和郎『日本人の起源』朝日新聞社、1984

植原和郎『日本人の起源』小学館、1986

第Ⅱ章 アイヌ民族博物館監修『アイヌ文化の基礎知識』草風館、1993

源 武雄『沖縄の民俗』第一法規出版、1972

平敷令治『沖縄の祭祀と信仰』第一書房、1990

伊波普猷『伊波普猷果集第二卷』平凡社、1974

江上波夫『民族の世界史2 日本民族と日本文化』山川出版社、1989

ジョージ・アシュワース『世界の少数民族を知る事典』明石書店、1991

菊地勇夫『アイヌ民族と日本人』朝日選書、1994

梅原猛・藤村久和『アイヌ学の夜明け』小学館、1990

R・ヒッチコック『アイヌ人とその文化——明治中期のアイヌ村から——』六興出版、1985

第Ⅲ章 オーストラリア人権委員会編『みんなの人権…人権学習のためのテキスト』明石書店、1987

三好文夫『アイヌの歴史』講談社、1973
北海道教育学会拙稿『オーストラリアにおける二言語教育』1988

『Commonwealth of Australia』Year Book Australia No.67 1983

N. S. W. Department of Education『Aboriginal Education Policy, Directorate of Special Programs.』1982

上村英明『先住民族の解放運動』を『世界』の中から (No.530、1989)

小山内洸ほか5名『先住少数民族と教育・文化』三友社出版、1990

(国際学部 米沢弘ゼミ卒)

〔担当教員から〕

このところ「日本文化の基礎構造」というテーマで、縄文・沖縄・アイヌ学について学生諸君と一緒に考えてきた。今回の後藤君のレポートは元来は後藤君のルーツの再確認という立場からスタートしたものだった。

後藤君はしばしば海外を旅し、カナダ、オーストラリアなどの先住民の方々と交流を深めている。なお一言つけ加えれば、後藤君は卒業式の当日「文教大学に来てアイヌの勉強がきるとは思わなかった」と語ってくれた。後藤君の今後の一層の研鑽と発展とを祈りたい。

(前国際学部教授・米沢 弘)

〔編集部・付記〕本論文が提出されたあと、アイヌ問題についてさまざまな前進がみられた。たとえば「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律（アイヌ文化振興法）」が97年5月8日、衆院本会議で全会一致で可決され、成立した。同時に、アイヌ民族の保護と同化を目的に1899年（明治32年）に制定され、差別的な呼称を含めて批判をあげてきた「北海道旧土人保護法」など2法が廃止された。今回の新法は、アイヌ民族という固有の「民族」を初めて法的に位置づけたものの、内容は文化振興が中心で、アイヌ民族自身が求める「先住権」など民族の権利にかかわる点は盛り込まれていない。代わりに衆参の内閣委員会で「アイヌの人々の『先住権』は歴史的事実」など5項目の付帯決議がなされた。